

第3回くまもと未来会議 議事録

日時:平成24年11月26日(月) 15時~17時

場所:県庁本館地下大会議室

テーマ:州都

<出席者>伊東 豊雄 委員 (くまもとアートポリスコミッショナー)
小野 友道 委員 (熊本保健科学大学 学長)
姜 尚中 委員 (東京大学大学院情報学環 教授)
田川 憲生 委員 (熊本商工会議所 会頭)
坂東 眞理子 委員 (昭和女子大学 学長)
御厨 貴 委員 (東京大学先端科学技術研究センター 客員教授)
蒲島 郁夫 議長 (熊本県知事)

【事務局】

それでは、ただ今より“州都”をテーマとした「第3回くまもと未来会議」を開催いたします。私は、会議の事務局を担当しております、熊本県企画振興部企画課の坂本と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、本日出席の委員の皆様をご紹介させていただきます。

くまもとアートポリスコミッショナー 伊東 豊雄 委員

熊本保健科学大学 学長 小野 友道 委員

東京大学大学院情報学環 教授 姜 尚中 委員

熊本商工会議所 会頭 田川 憲生 委員

昭和女子大学 学長 坂東 眞理子 委員

東京大学先端科学技術研究センター 客員教授 御厨 貴 委員 です。

それではこれより、議長が会議の進行を行います。蒲島知事、お願いします。

【蒲島議長】

皆さん、こんにちは。大変お忙しい中、“州都”をテーマとした「第3回くまもと未来会議」にご出席くださり、誠にありがとうございます。また、今日はたくさんの傍聴の方に来ていただいております。ありがとうございます。

さて、2期目のマニフェストで「百年の礎を築く」ということを4本柱の一つとして掲げました。私たちは百年後に何を残せるか、そのために今どう動くべきかということを考えることがとても大事です。私は将来的には、この九州は道州制のもとで独立する、そのような姿が見えるのではないかと思っています。道州制ができた時に州都について考えるのではなく、今から考えておくことが肝要だと思っています。そのため、この州都をテーマとした未来会議を開催しているわけです。

2回の会議で地理的な視点をはじめ、経済や安全、安心、暮らしやすさ、政治など幅広い視点から、さまざまなご意見をいただきました。まさに熊本のレベルアップとともに、熊本が九州全体に対して何ができるかを考えるうえで、貴重なご意見をいただいています。そのご意見に基づき、「州都構想の骨格(案)」について、本日はさらに議論を深めていけたらと考えています。ぜひ、委員の皆さまには、忌憚のないご意見をよろしくお願ひしたいと思います。

まずは意見交換に入る前に、「州都構想の骨格(案)」について、参考資料も併せて、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

それでは、座ったまま失礼させていただきます。

資料をご覧ください。お手元の「州都構想の骨格(案)」という表題の資料、A3横の2枚の資料です。前回、前々回の議論を基に整理をしました。

1枚目に「州都構想の目的」「州都選定の視点」「州都の条件」、そして今回新たに「州都のイメージ」という項目を追加して、「熊本が目指すべき州都の姿」をまとめています。

2枚目は「州都に向けた取組みの方向性」ですが、「現状」のところでは熊本の「強み」、「弱み」について、前回、前々回いただいたご意見を中心に記載をしています。それを踏まえ、「結ぶ」、そして「開く」をキーワードに今後の取組みの方向性を整理したところです。

それでは中身について、1枚目からご説明します。まず州都構想の目的ですが、前回、九州のどこの県からも支持を得られるよう、「九州の多極分散型発展」というものを全面に押し出すべきというご意見をいただきました。今回、「多極分散型発展を目指すこれからの九州にあって、熊本がどのような貢献ができるか考えるきっかけとなる」ということを第1の目的としています。

2番目には、「州都を目指す過程で、より品格があり、活力のある県へとレベルアップを図る」としています。

3番目の「道州制が実現した時に、すぐに熊本が州都になれるよう準備」ということについては、前回から変更はありません。

次に州都選定の視点ですが、5つの視点を掲げています。前回のご指摘を受け、「経済的視点」を追加しました。また前回、「危機管理的視点」としていたところにつきましては、「安全、安心の視点」に改め、「暮らしやすさの視点」としていたところについては、「品格、暮らしやすさの視点」と表現しました。それぞれの視点ごとに州都のイメージも含めてご説明をします。

まず「地理的な視点」からは、州都の条件として、道州内の主要都市からアクセスが容易であることが必要と考えられます。そこから導き出される州都のイメージは、高速交通網が整備され、九州の主要都市と短時間で行き来ができるというものです。

次に「経済的な視点」では、第三次産業が集積し、経済面でも拠点性があるということとしています。州都のイメージは、多くの人々が交流し知識集約型の産業が集積している。また、起業しやすく、新しい産業が立地する都市であるというものです。

次に「安全、安心の視点」からは、州都の条件として、危機管理の拠点となりうること、災害に

強い都市であること、治安環境が安定していることが挙げられます。州都のイメージとしては、水や食料等の資源が豊富にあり、州内全域を支援できる能力が高い都市であるとしています。

次に「品格、暮らしやすさの視点」からは、文字どおり品格があること、生活のクオリティが高いことが必要と考えられます。州都のイメージとしては、歴史、文化の息づく品格がある都市、充実した教育環境、多様な価値観を認め合い、転入者も暮らしやすい都市、人と人、人と自然のつながりを実感できる都市というイメージです。

次に「政治的視点」では、州内の各地域から政治、行政の中心であることを認められ、支持されることを州都の条件として挙げています。そのためには、住民の機運の醸成が必要であると考えています。そして州都のイメージについては、多極分散型発展を目指す九州として、各地域の自立的な発展を図るために必要な行政機能は分散しつつも、九州の方向性を議論し決定する機能、そういった場がある都市というイメージを記載しています。

以上のような州都のイメージをまとめますと、九州における州都は、九州各地域と緊密に結ばれ、多くの人々が交流し、全国、世界に開かれた活力あふれる都市で、住民がクオリティの高い生活を実感できる都市。熊本が目指すべき州都の姿は、そのようなイメージだろうと考えています。

2枚目をご覧ください。これまでの会議でご指摘いただいていた熊本の強みと弱みについて、視点ごとに整理をしています。

「地理的視点」での本県の強みとしては、九州の地理的な中心に位置し、広大な平野が存在すること。阿蘇くまもと空港、縦軸としての九州縦貫自動車道・九州新幹線が存在することが挙げられます。一方、弱みとしては、大分、宮崎との横軸としての幹線道路ネットワーク等が十分に結ばれていないことが挙げられます。

次に「経済的視点」についての本県の強みとしては、県内の需要を県内の供給で賄える自己完結型の経済であること。南九州を統括する支店が存在すること。全国有数の農業県であること。市街地が賑わっていることなどが挙げられます。一方、弱みとしては、自己完結型で、域内循環型の経済であることが、結果として外部との関わりが薄くなりがちな閉鎖的な経済であること。また、国際線や国際航路が少なく、アジアをはじめ、世界と十分に結ばれていないことが挙げられます。

次に「安全、安心の視点」についての本県の強みとしては、豊富な水、食料等の資源とそれを生かした自給自足型の危機に強い産業構造、九州の危機管理を担う陸上自衛隊西部方面総監部の存在、さらには高い医療水準が挙げられます。一方、弱みとしては、高規格道路などの代替ルートが乏しい交通インフラであり、災害等の緊急時に結ぶ機能が不十分であることが挙げられます。

次に「品格、暮らしやすさの視点」についての本県の強みとしては、熊本城などの歴史と文化、地下水や阿蘇、天草等の身近にある豊かで美しい自然、藩校「時習館」や五高等の伝統を受け継ぐ高等教育機関の集積、地域生活において心のつながりが感じられる社会などが挙げられます。一方、弱みとしては、熊本の強みである品格をうまく外部に発信できていない、生かされて

いないこと、またバスを中心とした公共交通の路線の分かりづらさなど、使いやすさに課題があることが挙げられます。

次に「政治的視点」についての本県の強みとしては、九州農政局等の国の出先機関が存在すること、中国・広西壮族自治区や韓国・忠清南道、アメリカ・モンタナ州との30年に及ぶ交流の実績などが挙げられます。一方、弱みとしては、かつて多数存在した国の出先機関が他地域に移ったこと等により、中心的機能が相対的に低下していることが挙げられます。また、国際的な機関が少なく、国際的な会議の開催も少ないことなどが挙げられます。

以上、熊本の現状をまとめますと、熊本の強みとしては、九州の中心的機能を担う十分な潜在能力があることが挙げられますが、一方、弱みとして、九州各地とのつながりや、全国や世界との関わり方が十分とは言えないことが挙げられます。九州全体のために、熊本の強みを伸ばし、弱みを克服していく必要性があると考えています。そこで、熊本と九州を「結ぶ」、熊本を全国、世界へ向けて「開く」ということをキーワードに、「今後の取組みの方向性」を整理しました。

まず地理的視点においては、「横軸を結ぶ」という方向性です。熊本と大分、宮崎との横軸の幹線道路のネットワーク等を充実させることが必要と考えております。

経済的視点においては、「知の集積と交流拡大」を目指します。企業等との研究開発部門の誘致など、知的産業を集積しつつ、国際的な空路、航路の拡充などによって、国内大都市圏、アジア市場との経済交流を拡大することが必要と考えています。

安全、安心の視点においては、「九州を支える防災拠点づくり」という方向性を掲げました。危機発生時に、直ちに九州各地に支援ができる体制を整備するなど、防災拠点としての機能の充実が必要と考えています。

品格、暮らしやすさの視点においては、「品格あるオープンな生活圏の形成」を目指します。この熊本の宝である歴史と文化、自然を保全し、継承して、さらに品格を高めながら、県外からの転入者にも住みやすい、おもてなしの心に満ちたオープンな生活圏を形成していくことが必要と考えています。

次に、政治的視点においては、熊本を開いていくための今後の取組みの方向性として、「九州の良き世話役」となることを目指します。九州全体へのサービス機能を持つ公的施設の整備や、観光、地域振興等県境を越えた連携を推進し、官民挙げての九州一体となった取組みの事務局機能を担うなど、九州全体のための行動が大事だと思っています。

また、領事館や国際機関等の国際的な施設の誘致を行うことなどにより、九州の熊本として、海外からも認知されることが必要だと思っています。このような取組みを進める原動力は、行政や企業のみならず、県民の皆さん一人ひとりの熱意だと考えています。しかし、1番下の左側の所に記載しましたが、先日の県民アンケートの調査で、州都になってほしいと回答した人の割合が、32.7%にとどまるなど、機運の醸成という点では、県民の熱意が高まっているとは言えません。今後、県民の皆さんが州都の論議に主体的に参加していただくために、動機付けやきっかけづくりをしていく必要があると考えています。

以上、前回の議論を基に「州都構想の骨格(案)」として整理したものです。

続きまして、「参考資料」と書かれたA4の資料をご覧ください。「州都構想の骨格(案)」の地理的、経済的など5つの視点ごとに、その参考となる資料をまとめています。

1ページには、「地理的視点」の資料として「九州の時間地図」を付けています。所要時間を距離として表した地図で、今回は熊本市を起点として道路を利用した場合のものを付けています。

次のページですが、九州の高速道路などの高規格幹線道路の概要図です。

3ページは、「経済的視点」の資料として、「地方空港における国際航空ネットワークの展開」の状況を示すものです。

次の4ページには、熊本の主要産業の立地状況などの資料を付けています。

5ページには、海外との交流状況を示すデータとして、外国人宿泊者数のグラフを掲載しました。

次の6ページですが、「安全、安心の視点」の資料として、「人口10万人当たりの病院病床数」の九州各県の比較です。熊本は全国第3位となっています。

次のページは、「品格、暮らしやすさの視点」の資料として、現在県が取り組んでおります加藤・細川ヘリテージプロジェクトの概要をまとめたもの、そして次の8ページには、世界遺産登録に関する資料を載せています。

9ページは、「上水道への地下水使用割合」でございます。県全体として、全国第2位となっています。

10ページのグラフは、留学生数の九州各県比較です。九州では、下から3番目となっています。

11ページには、「政治的視点」の資料として、県で実施している県境連携の取り組みをまとめています。

次の12ページですが、コンベンション開催件数、参加者数のデータです。政令指定都市の数字を参考に掲載しています。

最後のページは、「九州の外国公館、外国政府関係機関の一覧」です。そのほとんどが、福岡県に設置されているのが現状です。

資料についての説明は以上です。

【蒲島議長】

どうもありがとうございました。それでは意見交換に入りたいと思います。

まずは、初めてご参加の姜委員に、ご自身の考えられる州都のイメージなどを含めて、ご意見を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

【姜委員】

資料として、11月25日(日)に西日本新聞が出した「提論 日本再生へ」がありますので、見ていただきたいと思います。

今事務局からご説明がありました。九州や私たちが熊本をどうするかという、差し迫った問題を考えるに当たり、なぜ道州制であるか、なぜこういう機関が必要であるかというようなことについて、少し巨視的な視点から私の考えを述べさせていただきます。

私自身は、北海道から本州、四国、九州、沖縄を含めて、いろいろな所を回って見たつもりです。もちろん、最近の韓国や中国でのさまざまな動きがあって、国レベルではいろいろな問題がありますが、私個人は、やはり九州が東アジアに近いという地政学的な条件が、今後最大のメリットになることは間違いないと思います。そういう点では、北海道に行きますと、領土問題がまだ解決しないということもあって、北海道自体に札幌一極集中が進み、生活保護世帯が増えて、札幌自体も非常に地盤沈下をしているというような現象が地方では起きています。

また、四国に行きましても、四国の地理的な条件もあり、九州と比べると今後の展望がなかなか開かれない。日本は、一応4つの大きな島から成り立っているわけですが、その中で、やはり九州の存在というものが非常に大きくなるであろうということは、一応私自身もいろいろなところを巡って考えてきたことです。私は、おそらく本州自体が北と南、そして東京を境にして、中部地方、さらには関西などに分かれるのではないかと思います。今、新幹線のぞみで2時間半位かかるわけですが、日本の技術力をもってすれば、おそらく10年以内に、リニアモーターカーで1時間半位の経済圏ができあがるのではないかと思います。ここに、日本の1億2千万人のうちの6千万人以上が集中していくのではないかと思います。GDPから見ても、日本のGDPのおそらくかなりの部分がここでつくられていくと思います。

また、最近私は、富山と金沢の方に行きました。これは、九州や北陸にも該当することですが、隣の県ほど仲が悪い。そしてなおかつ、隣の県ほどお互いに良い意味でも悪い意味でも非常に競合し合い、どうやったら富山市と金沢市の特性を生かせるか、新幹線を引いてどうするかということが、かなり議論されています。そういういくつかの、ある種の地域統合ブロック化が進んでいくとすれば、九州がやはり1つのリミットになり、九州全体で人口約1千3百万人、GDPもほぼ1割になると思います。これが縦軸と横軸で、それこそ半日経済圏になり得ればどうなるか。釜山も今、400万人から、その周辺を入れると500万人近くまで人口が膨れ上がっています。そういう特別市やその周辺はもう2千万人近くの人口があり、旅順、大連も、もう数百万人です。今、福岡市だけでもまだ200万人には達していません。つまり、東アジアの中で、人口規模からすると、都市間交流においては、福岡市でも釜山市と比べると人口の規模においても劣ります。しかし、九州を面と考え、それを半日圏で結びつけるとしたならば、十分私はソウルとも対等にやっているとしたいと思います。それぐらいオール九州というものが進めば、私は九州の未来というものが非常に大きいのではないかと、個人的には考えています。

そういう中で、なぜ熊本に州都を置く必然性があるのか。九州全体が半日圏で結び付き、九州の面となって約1千3百万人の人口が、いわば東アジアのある種のメガシティに対抗でき、さまざまな交流ができるという、そういう時代を導き出していくためには、私はやはり熊本に州都を置くべきだと、これをどうやって内外に向けて説得をもってやれるかということが今一番問われていることだと思います。

必然的に、事務局も「多極分散型」と言います。福岡市に一極集中が進めば、間違いなく九州のミニ東京ができるようなものになってしまいます。そういう点では、やはり経済、金融を切り離して、行政、文教などの視点で、福岡以外の所に一つの拠点を置くべきです。オーストラリアではキャンベラも実に小さな町でした。また旧西ドイツにおいてボンは、ほとんどのドイツ人にとって馴染みのない所でした。

そういう点で、熊本について、長所が裏を返せば短所になり、短所である部分が、ある意味においては長所でもあるわけですが、私個人はオーストラリアや旧西ドイツの例を見れば、熊本は十分州都に値すると思います。もちろん、核構造やソフトの部分でいろいろとまだ考える部分があります。しかし私個人は、地位が人間をつくるように、一定のステータスを与えられると、それにふさわしい人間はできていくものであり、私は州都になれば、必然的にそれにふさわしい風格もできあがると思います。できる限りディーセント(適正)に、あまり目立たずに、いろいろな応援団をつくりながら、州都に向かっていった方がいいというのはよく分かりますが、海外のいろいろな例を見れば、私は、熊本は十分それに値するものを持っていると思います。むしろ、州都になっていけば、必然的に今足りないもの、例えば地域社会で外側になかなか開かれていないとか、通信コミュニケーション、情報についてまだまだ足りないとか、あるいは具体的に言うと、大分県にある立命館大学のように国際大学のようなものを熊本につくっていくとか、こういうことはおいおいできあがっていくものだと思います。

九州の中でなぜ熊本でなければならないのか、それは過去の歴史においてもそうですし、それから縦軸と横軸のアクセスから見ても、熊本市が全体の制度設計をやれば、明らかに熊本しかありえないということは、十分説得のある議論として展開できると思います。問題は、やはり外側の問題よりは、熊本の内側の問題だと思うのです。先ほど、ご指摘があったとおり、まだ県民調査では「州都になってほしい」と回答した人の割合が32.7%です。熊本市の、政令指定都市化による熊本全体の県の格差や市と郡部との格差について、熊本市が政令指定都市になり、そこがいわば一つの拠点になることによって、熊本県の周辺部にどのような波及効果があるのかということ、しっかりと説得していくべきだと思います。市が今後一つの拠点になることによって、地域のローカルな10万、5万人規模の都市とどういう関係を結んでいくのかということについて、もう少ししっかりとしたビジョンを出していけば、私個人は県民のサポートはもっと広がっていくのではないかと思います。

私は、熊本が州都になることについて、外的条件においてはさほど心配していません。むしろ内部の問題として、今後、県民の中に、それを下から盛り上げていく力を、どううねりを出していけるのか。熊本市と県全体の郡部をはじめとするいろいろな地域等のネットワーク、その波及効果がどのようになるのかということもしっかりと説得していけば、私は県民のご理解はもっと深まっていくのではないかと思います。

最後に、急に壮大なことを申しますと、最近、ジョンズ・ホプキンス大学のケント・カルダーという人を呼んでお話をさせていただきました。彼の最近の本が「新大陸主義」ですが、「ユーラシア大陸の中に、さまざまな地域統合が起きている。その地域統合の一番端に、現在の朝鮮半島があり、

そして九州がある。今、九州で起きているこの微弱なさまざまな動きというものは、実はユーラシア大陸規模で、いろいろな地域でそのような地域統合のさまざまな試みが起きている」というように、カルダー教授も位置付けてくれました。今の九州のこの動きが、日本の再生にとって必要であり、外部のそのような大きな流れ、渦の中に九州があり、その中心には熊本があるということをご理解していただければ、この州都構想というものが、決してないものねだりではなく、歴史の必然であると私自身も思っています。先ほど蒲島知事が、百年後の熊本ということを言われましたが、この10年間で熊本は頑張れる、今後の熊本は百年に向けて本当に栄えていくのではないかと、私自身は確信しています。

【蒲島議長】

どうもありがとうございました。

続きまして、皆さんに順にご意見を伺いたいと思います。今回は、九州全体のために取り組むには、熊本の強み、弱みを踏まえて、今後どう取り組んでいくべきか、また、「熊本と九州を結ぶ」、また「熊本を全国、世界に開く」ということをキーワードに今後の取り組む方向性について、皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。まず、伊東委員からよろしくお願いします。

【伊東委員】

私は、逆にとても小さいところからお話を始めたいと思います。実は今朝、阿蘇に行ってきました。これは知事の発案で、阿蘇で、今回被災された方たちのために、木造で仮設住宅を造りたいということ、そして、仮設住宅はとても狭くて厳しい暮らしなので、そこに「みんなの家」という皆さんが共同で集まって憩えるような、心をつなげるような家を造りたいという提案です。9月に決まってわずか2カ月で、今日、2カ所の竣工式を迎えることができました。一つは、それを造ってくださった職人の力です。この木造の建物を、大工さんが設計し考えることから始めて、2カ月でできあがるというのは、日本においては考えられません。熊本には、そういう素晴らしい職人の方がたくさんおられます。

また、昨日は、まだ工事が半ばですが、山鹿の小学校を見てきました。ここも木造の小学校で、素晴らしい職人の力によって、至る所で木の香りがするような非常に精度のいいものできています。これも熊本ならではの素晴らしいことだと思います。もちろん、木材の産出県であるということと併せて、大工さんが単に非常に腕がいいというだけでなく、コンクリートの型枠を造る大工さんや、そこに配筋をする職人さんたちの腕がいい。そして、「いついつまでに造ってください」と言うと、「自分がこれを造る」という気持ちになってやってくださいます。そういう方が熊本にはたくさんおられるという事実は、大変すばらしいことだと思います。そういう方たちをどうやってこれからも育てていくか。しかし、今そういう職人さんが非常に減っています。ですから、熊本が、木の産出ということと併せて、その職人さんを育てていくということがとても大事ではないかと思います。

そこから非常に話は広がっていくのですが、今朝できた「みんなの家」というのは、本当に10坪位の小さなものですが、土間や縁側、畳があります。これは、「土間にストーブがあったらいい

い」とか、「縁側があるとうれしい」など、その仮設住宅に住んでおられる方と話し合いながら造っているのです。仮設住宅にはないものが、そこにはあります。今朝も、お年寄りが大変喜んでそこで作ってくださったご汁を、食べさせてもらいましたが、ここに、実はこれからの暮らしの本質があるのではないかと。今回の阿蘇の仮設住宅は知事の発案で木造ですから、今までの鉄骨のものよりはだいぶいい出来ですが、それでもやはり、今までの仮設住宅というのは、何DKという公共、公営の住宅団地をモデルにして造られてきました。ところが、そこに住んでおられる住民の方は、そういうものを望んでいるのではなくて、縁側や畳、ストーブが欲しいなど、そういう暮らしを望んでおられます。そこにとても大きなギャップがあるのです。今までは、我々建築家もみんな、都市の暮らしを頭に描きながら、そういう集合住宅や公共建築を造ってきました。それが、今回の3.11の被災以後、変わっていきたくらうと思われます。つまり、地方で農業などに携わってこられた方々の考えておられる暮らし方が、これからの日本の新しいモデルになっていくのではないかと。そういう逆転が今起こりつつあると、いろいろなところで感じます。

それはどういう暮らしなのかとさかのぼっていくと、日本の農業がつくってきた暮らし方であり、文化なのです。この農業によって、日本の文化はつくられてきました。風景も、住まいも、そして衣類もそうです。そうやって、我々日本人がつくってきた伝統が、この百年間で切れてしまっただ。それがようやく今、もう一度、ここからそれを考え直す時代にきているのではないのでしょうか。日本が、被災後にここから何か新しいことを考え始めるとすれば、そこしかないと思っただ。熊本は幸いにして、東京や福岡など大都市にはないようなものをキープしてきてます。私はそこから何か始まるような気がして、熊本がこれから州都になりうるとすれば、経済を重点にした都市ではなくて、文化的とか美しい街ということが、とても大事だと思っただ。「美しい」ということによつて誰もが住みたくなるような、住居、居住を中心にした都市は、必ず大都市と違つた展開を示すでしょう。それは「住みやすさ」であつたり、「精神的な豊かさ」であつたりするもので、今日の「州都構想の骨格(案)」で、もっと私は「新しい美しさ」を強調してもいいのではないかとと思っただ。

震災以後、省エネルギー、再生エネルギーをどうするかということが、盛んに論じられていますが、今日も大変熊本は寒く、この会場も寒いという時に、冷暖房をつけないという節約ではダメだと思っただ。そうではなくて、2分の1のエネルギーで楽しく暮らす方法があると思っただ。建築的な視点で言うとな、今の消費エネルギーは半分にできます。もちろん自然再生エネルギーを利用しなくてはなりませんが、建築の造り方を少し工夫すれば、いくらでもそれを2分の1にできます。そして、減らすだけではなくて、減らすことが2倍楽しくなるという、そういう暮らし方をつくれると思っただ。そういうことを熊本からぜひ発信していただい、新しい文化、それが伝統とつながっている美しい街、そういう州都になったら素晴らしいと思っただ。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、小野委員よろしくお願ひします。

【小野委員】

私は第2回目の会議のときに、大学が2次的避難所になるべきという保健医療的な避難所のお話をした後、学生のボランティアのことを少しお話ししましたが、それと関係して、州都には学園都市の要素が不可欠であるというお話をしたいと思います。

二つありまして、一つは専門家集団としての大学です。シンクタンクの要素や、コンベンションシティとして存在するための、国際会議などを持っていくという意味合いが一つあります。もっと大きいのは、文部科学省が大学COCの機能の強化ということを言い始めました。COCとは、Center of Community です。「地域の拠点として、大学が地域の課題解決に取り組む」ということを打ち出しております、来年度から補助金をつくるという話です。そのことで、学生が活躍する場として、州都の学園都市が必要ということです。ボランティアの中心が大学生であって、そこに学生が集まる、都市が活性化する要素があると思っています。それは災害時だけではないと思います。介護予防や、2030年の医療の問題などに結びつけて、学生が活躍する場が必要だと思います。

3月11日以降、やはり学生の考えが少しずつ変わってきており、大学が呼びかけないのに、阿蘇へのボランティアを積極的に行っていました。そういう時代がきて、こういうボランティア精神、あるいはボランティアリーダーを育てる仕組みをつくるということが、今ちょうどいい時期ではないかと思っています。先ほど姜先生から、「内部の問題」や「市民の機運を盛り上げないといけない」というような話がありましたが、このボランティアによって学生の公共的な精神が磨かれるのではないかと思います。それは、公的なところからの公共という意味ではなく、民間、市民、あるいは学生といったところに基盤を置いた、社会的、地域的な公共性を醸成するチャンスだろうと思います。幸い熊本には、「高等教育コンソーシアム熊本」が立ち上がりました。今、財団化の準備を進めています。もう少し県・市と共にいろいろなことをやりたいと思いますが、その一つとして、このボランティアリーダーなどを育てるシステムを作れば良いと思っています。

ただ、大学の留学生に関しては、今日県から示された資料でも福岡が1万635人、熊本は667人ということで、これは勝負にはなりません。どうするかというと、人数は増えなくてもいいのですが、熊本が文化都市として日本人としてのアイデンティティーを失わないで、しかも外国人にそれらを理解してもらえるような場としての文化都市であれば、留学生がそのうちに少しずつ増えていくと思います。異文化を求めて来るはずですから、そこでじっと我慢しておけばいいのではないかと思います。ただ、黙って指をくわえてとはいきませんので、学生が集まる都市を模索しないとけません。ですから、熊本の文化や日本人のアイデンティティーが理解できるような仕掛けがあると、日本全国、あるいは世界から熊本の文化を訪ねて来るのではないかなというようなことも模索しています。文化の面においても、学生と一緒に、市民も、文化的行事や活動に対して、先ほど申しました意味での公共的精神をかん養する必要性があるのではないかと思います。

一つは、コンベンションセンターができれば、椅子1つずつに自分のネーミング・ライツがあって、「これは誰々の椅子だ」ということで、お金を少し出していただき、熊本城の一口城主のようなことをして意識を持たせることが必要だと思います。もう一つは、熊日新聞に書いてありましたが、九州で、総合的・体系的な歴史博物館がないのは熊本だけという話でした。装飾古墳館というのは

あるのですが、一つで全体を見渡せるような体系的に勉強できるものはありません。蒲島知事が、近代文学館を少しそういうふうにされると聞いていますが、百年の大計なら、もっと大きなことを言わせていただくと、いろいろな文化的な拠点はそのまま、それを一堂に理解できるような歴史博物館を思い切って造っていただく。今知事が住んでおられるところを全部取り払って、大きな歴史博物館を造っていただくというのはいかがでしょう。

また、そのような中で、どれだけ人を集めて滞在してもらえるか。勉強会ができるとか、あるいはいろいろな難しい古文書を読めるような学芸員がたくさんいるとか、そういうことが大切ではないかと考えています。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、姜委員お願いします。

【姜委員】

なぜ熊本でなければいけないのかということについて、希望も入れてお話しします。

もし、熊本が州都構想で、これができなくなった場合を考えると、私は多分、福岡市のベッドタウンになるのではないかと思います。その可能性は十分ありますし、新幹線の通勤、通学がかなりコストダウンされれば、ベッドタウンというのはやはりある種の衛星都市ですから、効果的に熊本が培ってきたものや熊本のいろいろな良さというものが、だんだん中性化して行って、郊外型の都市へと移り変わっていくと思うのです。それに抗うためにも、私はやはり、熊本を1つの拠点として、そのことが九州全体にとっていいことであるということ、今後きちんと理屈づけしていくということが一番大切なことだと思います。

2番目に、九州の地図を見られるとよく分かるのですが、足が鹿児島のところだとすると、首が曲がって、へそを見ているように熊本を見ているのです。有明海に面している熊本が、やはり人間の体の中心のへその部分に当たります。今後、熊本のためには、この有明海というある種の内海の中での熊本の拠点性と、同時に九州の中心から東側へと抜けていくロケーションとしての熊本をどう接合するのかということを考えていただきたい。

3番目に、今、ご発言がありましたように、熊本は文教都市でもありますが、実は3年後夏目漱石が没後100年です。私はこの間、漱石の転籍した跡がある北海道の岩内という所に行きましたが、全国にもかなり漱石の私的な研究機関やネットワークがあるので、3年後に、この熊本で何か開催できないか。夏目漱石研究はかなり静かなブームでもありますし、相当な数の人が来ると思います。過去において、松山に全部取られたということに、私は、ほぞをかむ思いがあったのです。5年近くもいたのに、こちらが本家本元だということを考えて、何とか漱石を3年後の大きな目玉にできないか。ここが、やはり日本の文化、伝統などの拠点だということで、今、何とか連載番組を作れないかなど、NHKにもいろいろ働きかけているところです。近代日本に関わるような大きな足跡のある人物としては、宮崎滔天もいますが、漱石は日本国民全体としては共有財産ですから、何とぞ3年後をめぐりに少し考えていただきたいと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございます。水前寺公園から江津湖までの道を「漱石の道」としたらどうかと、同じようなことを細川元総理がおっしゃっていました。「哲学の道」というのが京都にあります。それでみんな、あそこを歩くのです。そういうこともアイデアとしてありますので、考えてほしいと思います。それでは、田川委員お願いします。

【田川委員】

田川です。何点かお話ししたいと思います。

事務局で作られました「州都構想の骨格(案)」は、ほぼ私たちがこれまで話したことをうまくまとめておられ、改めて事務局の優秀さに驚きました。逆に言うと、もうほとんど話してしまったので、今日何を話すべきか難しいと思いながらここに座っております。

まず、州都構想の目的で「多極分散型発展」というのは、まさに日本がこれまで犯してきた東京一極集中を、九州では絶対再現させないということが1点と、熊本に州都をということを主張するがゆえに、熊本のエゴと取られないというこの2点があるということです。

次に、「品格があり、活力のある県へとレベルアップを図る」というのは、当たり前のことだと思います。州都を考えるうえで、熊本にはいろいろと強いところや、弱いところがありましたが、まさにそのものであり、やはり州都というものはにぎわいが無いといけなし、本当に栄えていなくてはなりません。これが大前提だということです。

それから、「道州制が実現したときに、すぐに熊本が州都になれる準備」については、2巡目でお話します。

前回から今回までに何があったかという、10月22日に、九州中央自動車道の延岡線について陳情を行いました。延岡線は、延岡から県境を渡り、山都町を通って嘉島、御船につながる高速道路です。宮崎県からは、宮崎県知事、当該の市町村長、商工会議所、経済界が出て、熊本県は、蒲島知事、現地の市町村長、そして商工会議所から私も出ました。両県の知事というのはこれまであったかもしれませんが、これに商工会議所が加わったというのは初めてです。宮崎県の商工会議所の会頭から「熊本は、冷たい」と言われ、「どうしてですか」と聞くと、「延岡線に対して、なかなか一緒になって立ち上がってくれない」と言われたことがありました。そこで、知事とも話をして「合同でやりましょう」ということになり、初めて両商工会議所も行政と一体となって、国交省等に延岡線について陳情しました。

その中で、国交省に陳情した際、九州中央自動車道の区間でどちらを先に着工したらいいか聞かれた時に、宮崎県知事が「それは宮崎県側からどうぞやってください」と言われ、蒲島知事が「それはどうぞ。宮崎県から結構です」と言われました。いわゆる腹の太さを見せられたのです。それで、国交省の方が「これで州都は熊本で決まりですね」と言われ、そうしたら宮崎県側が「それは、いたしかたがありません」と言われました。

私は、熊本に州都を持ってこようというときに、いわゆる「他県のために汗をかき」、「事務局的機能を熊本県が行う」、そういうことをすることによって熊本県が貸しをつくっていくということが大

事だと、ずっとこれまで言ってきました。今は、宮崎の商工会議所会頭に「もう熊本は冷たいと言わせないからね」と言うと、「それは十分分かっています」と言っています。

先ほど姜先生が「内なる敵」と言われましたが、そういう「外なる敵」に対しては、こういうやり方が一番効果があると思いました。

2つ目ですが、経済界の話として、熊本経済同友会と熊本商工会議所が、二人三脚でとにかく熊本のことを考えようと、新しい体制でスタートしております。両者の正副代表幹事及び正副会頭が、3カ月に1回意見交換をしており、熊本の課題についてお互いに意識を共有しています。そういう中で生まれたのが、熊本経済同友会と熊本商工会議所合同で熊本都市圏ビジョンをつくらうという動きです。これは、経済界初であり、熊本の歴史の中でも初めてのことです。両者からメンバーを出し合っってプロジェクトチームをつくり、2年以内に皆さまに発表するという段取りです。県も市もそういうビジョン等をつくりませんが、経済界と違うのは、行政はどうしても他県の行政区間のことに言及できません。経済界は、全くそれは関係がありません。宮崎や福岡、佐賀のことも言及できるという意味では、経済界のビジョンというのは、非常に弾力性があり面白く、九州全体でどうしていくのかということまで突っ込んでいきたいと思っています。ぜひ皆さんにも、いろいろご意見があればいただきたいと思ひます。

それから、鹿児島、熊本、宮崎南九州3県の商工会議所連合会で、意見交換会をしています。今まさに、道州制についても話を進めています。一方、北九州の方がありません。先日、大分、佐賀、長崎の会頭がいましたので、そういうのをつくらうではないかと持ちかけたら、会頭レベルではすぐ賛成していただきまして、「では、4県でやりましょう」ということになったのです。ところが、いざ事務局におろしたところ、実は、鳥栖商工会議所が中心となって、福岡まで含めた、福岡、佐賀、長崎、大分の4県の交流会をつくっていたのです。私たちが、道州制について一番先に動いているというのは誤解であり、鳥栖はもっと着々と準備を進めています。そういう中でどうするか事務局と話をしていますが、それなら熊本も一緒になって入っていこう。つまり熊本県というのはちょうど、ど真ん中にありますので、南九州でもあり北部九州でもあります。両方に参画することで熊本の存在価値を高めようではないかと、今検討しているところです。

もう1点は、配付された資料に、非常に面白いものがありました。皆さんはそれを見て、福岡との差が出過ぎていると思われると思ひます。諸外国の領事館などの設置数も、熊本と比較にもなりません。そういう意味では、そっくりそのまま州都を福岡に持っていった方が一番簡単にできます。前にも申しましたように、九経連など福岡の経済界は、道州制論議を今一生懸命やっていますが、そのままであれば当然福岡にいくと思ひます。それをこういう形で「一極集中はいかがか」と言うことで、福岡以外でも各県を友だちにできるということだと思ひます。

それから姜さんが先ほど言われました、県民をどう鼓舞するかということですが、私は新聞社出身なので、32.7%の県民が「熊本を州都にしてほしい」と回答したのは、逆に言うと非常に高い割合だと思ひます。ほとんど道州制についての論議があまり起きていない現時点で、32.7%の県民が支持をしているというのは、今後のやり方次第では極めて可能性が高いと思ひます。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、坂東委員お願いします。

【坂東委員】

昭和女子大学の坂東です。今日、東京から来たのですが、実は昨日の夕方蒲島知事と東京の椿山荘でお目にかかっておりました。現代政治学叢書(そうしょ)完成記念の集まりがありまして、日本の学会や芸能界、経済界の方も含めて、代表する方々が集まっておられました。政治というのはこういう状況ですが、知事は、自分は政治理論を着々と実行していると大変意気軒昂でした。本当に知事は夢をおっしゃるだけではなく、実現なせる推進力、パワーがおありで、この現代政治学叢書もしっかりと書いておられます。これで叢書シリーズが完成したようですが、知事という仕事と学者の仕事を両方実現されていることに、改めて敬服しました。この州都もおそらく2年前は、みんな「そんなの無理だよ、不可能だよ。夢物語だよ。実現するはずがない。当然福岡だ」と思っている方が多かったのではないかと思います。これだけ州都熊本ということ言うだけではなく、そのための布石を着々と打っておられることによって、もしかしたらできるかもしれないと32.7%の人が思うようになってきているというのは、大変素晴らしいことだと思います。

今配られている「州都構想の骨格(案)」の「今後の取組みの方向性」で、全体の方向としては非常によく、十分に練られたいい提言があるのですが、最後にこういうのを付け加えてはどうですかという提言を、いくつかさせていただきたいと思います。

まず、「今後の取組みの方向性」で、「横軸、域外のつながりを強くする。熊本と九州を結ぶ」という意味で、この幹線道路について書いてありますが、そこへ「熊本を全国に、世界に開く」という部分から、「LCCなど熊本空港を世界に開く。世界だけではなく他の地域に開く」ということを考えてほしいと思います。ローカルではあまりメリットがないのではと思われるかもしれませんが、羽田発着枠は大変制限されている中で、例えば茨城空港などの例があります。茨城空港から東京まで車で1時間くらいですが、そのバスをモノレールと同じ500円で提供するなど、羽田と比べてそんなに差はないと思わせるような仕組みを作って、茨城空港の国際線の乗り入れLCCを増やしているそうです。ぜひ阿蘇くまもと空港もそうした取組みをなさせて、九州のどこの市や町へも、500円が無理なら1000円でもいいので、バスと組み合わせるなどの形で、熊本を全国、世界に開くうえで、「LCC、空港のより活性化」というのをぜひ付け加えていただければと思います。

それから、2つ目の知の集積、交流拡大、経済的な活力を増すためには、やはり新しい起業がどんどん行われるような環境が大事だと思います。キャッシュバンクは銀行にお願いしなければならないのかもしれませんが、金融面だけでなく、人をたくさん抱えて紹介する人材バンクとして、専門家が新しくできあがったばかりの起業のコンサルタントをする、支援のプラットフォームのような仕掛けづくりを、ぜひしていただきたいと思います。「知的産業の集積」というのはあまりにも抽象的でぴんとこないのですが、起業しやすい熊本として、シリコンバレーのように阿蘇バレーみたいな形で、阿蘇・熊本に行ったら、夢や希望のあるベンチャーの子たちがいろいろなことにチャレンジでき、それを応援するというような、「惹きつける」ということをぜひ考えていただきたいと思

ます。

それから、3つ目の安全安心の方はまさしくお聞きのとおりだと思いますが、4つ目の「品格あるオープンな生活圏の形成」で、「オープンな」も大事な要素かもしれませんが、ぜひ「魅力ある」という言葉を入れていただきたいと思います。先ほど、伊東委員も美しさというのが人を惹きつけるということを言われましたが、単にいらっしゃいとオープンにするだけでなく、惹きつける、寄ってくる、あそこはいいなどと言って人が集まってくるような、魅力ある生活圏の形成をイメージしていただきたいと思います。歴史や文化、地下水など本当にたくさんの宝があるのが解かれれば、みんな寄ってくるのではないかと思います。その時に、もてなしの心もいいのですが、よその人を取り入れる長期滞在型、長期コミット型というような、何かに責任を持って関わり合いになるというような滞在者を増やす。例えばグリーンツーリズムというのは、私は大変可能性があると思っております。今、日本人は平均1848カロリーしか食べないのです。戦後、1946年のお腹を空かせていた頃の人のカロリー摂取量は1903カロリー、1970年代前半の一番豊かになった頃は2300カロリー近く摂っていたのですが、その頃に比べるとみんないかにして食べないか工夫をしているわけです。そこで、これがおいしい、これが体にいいと言ってもなかなか食べる量は増えません。それよりも農村・農業が持っているたくさんの魅力として、例えば教育の面で農業に携われるというのは、とても大事なことだと思います。単なる収穫体験や田植え体験ではなく、草取りをしたりしてつらい目に遭いながら、苦勞して育て上げて収穫を終えるとこんなにうれしいのかというような経験をさせる教育的な効果や、あるいは自然に触れて本当に「ああ、美しいな」と感動するような効果があります。若い人や働き盛りの人も含めて心が折れてしまった、あるいは心に病を持っている人たちが、今大変増えています。それを、だらしがないなんて言うだけではなく、そういう人たちをもう一度再生させるような場として農村・農業が果たす役割というのは、とても大きいのではないかと思います。そういう人たちを受け入れる。担い手とまではいなくても、農業の支え手の裾野を広くするグリーンツーリズムなど、いろいろな可能性があるのではないかと思います。農業に、食料生産の機能だけではなく、教育、福祉、健康、環境など多様な機能を発揮させていただきたい。ぜひ、「おもてなしの心に満ちたオープンな生活圏」というのは、熊本に住んでいる人たちだけが心豊かに暮らすだけではなく、他の地域の人がそれに惹かれて集まってくるような生活圏をつくっていただきたいと思います。

それから、歴史や文化は大変充実し、また高等教育も、小野先生始め皆さんおっしゃるとおりです。あともう1つは、みんなが、初等・中等教育はこれでいいのか、日本人は子どもから劣化していってしまうのではないかと心配していますが、いきなり全国一律に、学校制度や教育委員会制度のことを言うよりは、ぜひ、県で、初等・中等教育もしっかり力を入れていただきたいと思います。普通のまともな市民生活ができるレベルの能力を証明するというのを熊本県知事が認証するなどのような形で、中学生や高校生にもっと基礎学力をつける。熊本ブランドとして、「熊本の教育はこれだけのレベルは保証していますよ」ということを出されたらどうか。しかし、教育関係の方たちの負担が増えるなどの、いろいろな意見があるかもしれません。例えば教員資格を持たない外国の青年たちが教壇に立つのを可能にするシステムとして、ALT(アシスタント・ラン

ゲージ・ティーチャー)がありますが、教育する免状は持たないが、英語の先生のアシスタントなら務まるというものです。私が一番可能性があると思うのは、60代、70代の識見ある教養豊かな定年後の方たちが、例えば小・中学校でAJT(アシスタント・ジャパニーズ・ティーチャー)やAMT(アシスタント・マスマティック・ティーチャー)、あるいはAST(アシスタント・サイエンス・ティーチャー)になれるような形で、みんなが熊本の子どもたちの力をつけるような仕掛け、仕組みをつくられるということです。いろいろなことを、ぜひ熊本から始めていただきたい。そうした、熊本が基礎力をつけるために本当にいい教育をしているということが、おのずと州都として注目の一致するところになってくるのではないかと思います。

最後に、5つ目の「良き世話役」というイメージはとてもいいと思います。「領事館や国際機関等の国際的な施設の誘致」については少し古いので、ぜひ「国際NPOや民間団体の本部を誘致する」ということを、お考えいただきたいと思います。今、国際社会のプレーヤーは、国だけではありません。NPOなどのいろいろな業界の本部のようなところにも、目配りをさせていただければいいと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、御厨委員お願いします。

【御厨委員】

御厨です。今日は何を話したらいいのか、ずいぶん考えましたが、いくつか申し上げます。

最初に「州都構想の骨格(案)」は、非常によくまとめていただいたと思いますし、「結ぶ」と「開く」という補助線で見えていったときに、何が見えるかがとても分かっていいと思います。ただ私は、この整理の仕方の中で、「強み」と「弱み」という言い方が若干気になります。「強み」と「弱み」と言うと、はっきりとスタティックに、ここは強いけど、ここは弱いという話になってしまいます。スタティックな形にしてしまうと、最終的に「良いところは良い」、「悪いところは悪い」ということになってしまいます。この「弱み」というのは、おそらく潜在的には開発できる能力があるような話ばかりだと思うので、ある種の「潜在性」のような言い方にしてはどうでしょう。「強み」、「弱み」は、もう少し言い方を変えて、ダイナミックに両方が展開の仕方によってはうまく回っていくようなネーミングにして、そういう整理の仕方になると、もっと州都構想に近づけるときの元気や推進力が出るというような気がします。それが第1点であります。

それから、第2点です。先ほどから大学などの高等教育の話が出ていますが、私はある財団の、30年続いている地域文化の賞の選考委員を、10年ほどずっとしてきました。地域文化というときに、ある特色が見えてくることがあります。最近の特色として、実は結構公立の高等学校が中心になって、地域文化に貢献しているというのがはっきり見えてきました。テレビにもなった有名なある地域では、高等学校の学生全員が、食を中心として取り組むことによって、レストラン経営から農業生産品、これを現実に商売として輸入してきて、スイーツなどいろいろなものを作り、それを地元で販売します。それを目指して、今度は地方から観光客がやってくるというようになり、

そこの卒業生は、その地域や周辺に就職の道を得ることができます。元々は過疎なのですが、そういう形での発展をしているというところがあります。この高等学校を表彰しました。すると、そればかりでなく、北九州のある高等学校が、魚部というサークル活動を通じて、ある地域の河川の成り立ちから現在、そこで獲れている魚が一体何であるか、それを一体どうしたら今後もっと地域に知らしめていくことができるかというようなことをやっていて、これも今、一つの大きな形になろうとしているところです。こういう高等学校というものを中心にした、その地域の文化の掘り起しのみならず、今言ったようにそれが一つのある種の商売になっていくという形をとり、雇用も生まれるということが現実に出てきています。こんなことは、おそらくこの熊本でも十分にできることであり、あるいはもう既にできているのかもしれませんが、そういうのをどうやったらよいかということは、州都になろうとしている熊本にとって、助けになる話ではないかということがもう1点です。

それから、次は政治の話ですが、政治と言っても歴史の話になります。我々が、今非常に困っているのは、今の選挙がどうなのかということです。選挙の話は今日はしませんが、それに関連したところで、この二つの政党があるときに、その政党のイデオロギーと政策の違いというのはなかなか見えてこないという話が、最近よくされます。これは、歴史的に一つ有意義な議論であり、今は全国どこでも同じ政党がいて、それぞれ、片一方が民主党、片一方が自由民主党となっているわけですが、この形になるまでに、実は日本の近代はいくつかの地域政党の集合であったということです。これは前にも一度お話したと思いますが、明治維新からしばらく経って、土佐派の板垣退助が中心になってできた自由党は、基本的に全国における地域政党の合流体であったということを思い浮かべます。そうすると、東北派、関東派、そして九州派というのがあったわけです。この九州派というのは、かなり大きな力を持っていて、全国政党としての自由党ができた時にも、九州派の人材が関わっていました。やがてその自由党が政友会になった時にも、この九州派の存在があり、その中には鹿児島出身の床次竹二郎や福岡出身の野田卯太郎がいて、その系列の最後に、熊本出身の松野鶴平が並んでくるというような形でした。要は、熊本も含むこの九州の各県の中から出てきた政治家が、その地域を代表しながら全国政党に関わっているという時代がありました。これは、戦後ほとんどなくなります。戦後は中央の力があまりにも強くなったために、そういうことがなくなって、地域は地域ということで切り離されています。しかし、今後こうした形になる可能性が実はないわけではない。今、TPPなどいろいろな問題を切っていく時に、本当の大都市の主張と、地方の「田舎」と言われている所の主張というのはあきらかに違うわけです。そうすると、今のような全国政党で二つに割れているという形ではなく、もっと地域に多少足をかけた形。今、維新の会が逆に地域の方が全国に足をかけるという形になっていますが、その逆のケース。つまり明治維新の頃に素朴にできた地域政党が全国化していくという形に、もう一度戻るといえることが、私はないとは言えないと思っています。その際に九州という地域が持っているキャパというのは、かなり大きいものになっているという感じがします。

なぜ、その話をしたかと言いますと、州都がなぜ必要なのかというのを考える際、全国レベルで、本州がいくつかに分かれて州都を持つとか、四国や北海道を持つというのとは違い、九州自体が、全国のレベルで州都というのが設けられるから九州もという話ではなく、九州には九州とし

て、そういう発想があってもいいのではないかと、そこからスタートした時に、はじめて熊本の良さというのをもっと見えてくるのではないかと考えたからです。

東京との近さ、東京の支店がいくつあるかなどというものさしで見る時代ではないのではないかと。だから、九州が九州として、もちろん日本全体の中で発展をしていくわけですが、その発展の可能性というのを、今言ったように「強み」「弱み」論ではなく、実際に州都を考える時期に、まだまだどういった潜在的な引き出しがあるのかということまで持っていき、全国の道州制の中で九州を考えるという話ではなく、九州からそういうものが必要だということを考え、別に必要ではないところはやらなくても結構ですよというぐらいのけん引力、推進力があると、もっと元気が出るのではないかと。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは2巡目に入ります。それではよろしく申し上げます。

【伊東委員】

ただ今、御厨さんのお話を伺っていて、これは政治の話ではなく、これからの街のあり方にも全く同じことが当てはまると思えました。先ほど申し上げたかったことも、実は自然とつながった新しい暮らし、その新しいライフスタイルこそ熊本から生まれるはずだし、それが全国に向かって展開していけるはずだということを、最近確信しているのです。

そのベースになっているのが、先ほど申しましたがやはり農業の伝統だと思います。坂東さんもおっしゃいましたが、私も、東北や四国に行きましても、最近かなり若い元気な人が農業をやりたいということで、都市部から地方に入ってきていることに気が付きました。むしろ農業の盛んな場所にいると、若い人は農業をいやだと言って都市に出かけて行くのですが、逆に都市に住んでいる人は、農業が魅力的に見え始めているという現象があります。ですから、どうやって熊本に農業を盛んにするための仕組みを作って、外から受け入れることができるか。あるいは先ほど申し上げた、職人である若い大工さんや型枠大工さんのような技術者を、どうやって外から熊本に迎えるシステムを作れるのかというのは、とても大事なことではないかと思えます。

前日も申し上げましたが、そういった木工技術に関しては、球磨工業高校が素晴らしい学校で、坂東さんの前で言うと怒られますが、東京の大学で建築学科に入るよりここに行った方が、これからの建築を作るにはよほどいいと思っています。それぐらいの素地はあるわけですから、それをどういう形で現実化するのか真剣に考えるべきだと、今日は感じました。

もう一点は、実は金曜日に、知事と小山薫堂さんと3人でお話させていただきました。我々は、25年間、熊本でアートポリスという新しい建築を受け入れていく事業を継続していただいているのですが、小山さんは、「こんないい建築がいっぱいあるのに、どうして熊本の人はずっと外へ発信しないのだ」と言われました。今日もこの「州都構想の骨格(案)」で、「強み」「弱み」と書かれています。私も、「強み」は既にたくさんあるのに、それを発信しないのが一番の「弱み」ではないかと思えます。そのことをもっと熊本の人はずっと自慢してもいいのに、それをこれからどういふ

うに、うまく外に向かって発信していけるか。これも金曜日にお話させていただいたのですが、例えばアートポリスに関して言えば、既にたくさんアジアの建築家や行政の人が、その建築を見に来ています。もっとそういう広報活動はありうるはずだし、こういう時にこそ、建築だったらいくらかも韓国や中国などの人たちと仲良くできます。我々も、度々レクチュアや新しいプロジェクトのためのコンペティションに招待してもらっています。ですから、そこで熊本が先頭に立って、アジアの建築家を集めて会議をやるような試みを、今始めていただけるととてもタイムリーだと思います。

【小野委員】

時間が無いので、一点だけお話をさせていただきますが、熊本にどうやって若者を集めるのか、あるいは人が来ていただける理由があるかということです。今、医療観光ツーリズムというのが流行っていますが、私はいささかそれには批判的で、お金持ちが来てMRIやCTなどをするというのはそのうちに飽きられます。中国でもどこでも、そういうものはすぐできますので、私は、文化・観光・ヘルスプロモーションツーリズムというのを提唱したいと思っています。

文化と観光としては、滞在型で漱石やハーンの勉強をしたり、その現地を尋ねたりすることが考えられます。あとは先ほどから出ているグリーンツーリズムとつながるのですが、ヘルスプロモーションという概念が非常に大きくなっています。熊本にも東アジアヘルスプロモーションネットワークというNGOの本部がありますので、そういうのを利用していく。今やっているのは、グランドゴルフ大会をして、試合のない時に健康チェックをします。そして、もう一つ離れたところでは栄養指導をしています。場合によってはそれを拡げて、例えば農業体験などで1週間滞在していただくということは、熊本であればいくらかでもできると思いますし、予防医学の原点に沿った構想ではないでしょうか。陽子線治療や重粒子線治療などは他を利用すればよいのです。

こういう大型の文化・観光・ヘルスプロモーションツーリズムを九州で広めて、宮崎、鹿児島、大分、長崎などと組んでやれば、非常に大きな魅力ではないかと思っています。そのうちに住みたい人が出てくるのではないかと思っています。以上です。

【姜委員】

まず一つは、先ほど多極分散型というお話がありましたが、結局福岡とどのくらいのリーディングができるかということが重要だと思います。福岡と熊本の根本的な違いは、物理的に言うと地下鉄が福岡にはあります。九州で地下鉄があるのは福岡市だけです。大体の政令指定都市は、大きなところは地下鉄があります。逆に言えば地下鉄があるということは、かなり中心部の地価が高いということです。ですから、福岡にまた州都機能まで持っていけば、かなり福岡市内の地価が高騰するし、そういう地価の問題も含めて、私はやはりそれを熊本に持ってくることはむしろベターであると思います。それからもし、今後熊本に州都を持ってくる場合には、今福岡市に拠点がある海外のいろいろな関係機関を、どのあたりのゾーンに集積させるのかということをしかりと想定して、あとは蒲島さんの腕力のようなもので、福岡とどんだんいろいろなところで、リーディングをしていただきたいと思います。

それから2つ目は、私はやはり頭の中に、シドニーとキャンベラのことがずっとあります。最近シドニーに行って何が一番悪くなっているかという、やはり地価が高騰しています。そして交通機関が全く働いていません。シドニーは今400万人近く周辺部が広がっていて、この間もタクシーにりましたが、タクシーの運転手が「ここは実はマニラと同じだ」と言っていました。それぐらいひどい状態だということです。福岡一極集中が進めば、ある種のシドニー的な状況になる可能性があります。オーストラリアがキャンベラにANU(オーストラリア国立大学)を置いて、そこを文教都市にし、キャンベラ空港も最初は小さな小屋みたいなところでしたが、今回行きましたらかなり国際的に大きくなりましたが、これも20年くらいかかっているのです。ですから、やはり福岡と熊本の関係は、シドニーとキャンベラのような関係にして、福岡がシドニー化するという事は、そのデメリットは福岡にとってかなり大きく、福岡市の将来設計を考えれば、明らかに州都は熊本に置いた方が福岡にとっても良いということが、シドニーとキャンベラの関係を見ていればよく分かるような気がしました。

そして、最後に申し上げたいことは、福岡市の最大の弱点はやはり港なのです。オリンピックを誘致するときに私もかなり加わり、ウォーターフロント構想を一挙にやって、非常に深い相当なトン数の船でも着けられるようなものをつくりたかったようですが、今はそれができていない。これが最大のネックだと言っているのです。ですから、有明海に面した、特に三角港がなかなか開発が遅れていると思いますが、一つは阿蘇へとつなげて行く横の線と同時に、有明海から海のルートはどうやって開いていくか。今後、熊本の物流やアジアに開かれる物流を考えていくと、海、特に港湾を、今後本当にどうできるか。今回の資料の中には、海、港湾の方がほとんど触れられていませんでしたので、やはり私は、州都になれば当然物流の拠点になるはずであり、そういうことも福岡より先んじてやればいいのではないかと思います。つまり逆に言うと、福岡には悪いのですが、福岡に今、インフラやいろいろなところで劣っている点は何かということ、しっかり研究していただきたいということを申し上げておきたい。

【田川議員】

先ほど申しましたように、経済界で熊本都市圏のビジョンを作っている最中ですが、その中で会員に対してアンケートをしたものがあります。皆さまに、今後検討する中で参考にさせていただくということでお話しします。将来の熊本都市圏の姿として、どのような都市づくりを優先すべきか会員に聞いたところ(上位3つを選択)、まず「都市基盤が充実し、災害に強く、利便性の高い都市」が一番多いです。会員回答数が74件のうち34件。

2番目が「豊富な農水産物の生産に加え、食に関わる産業・情報が集積する食の拠点となる都市」で31件。

3番目が「文化・芸術イベントや、豊かな自然に多くの観光客が訪れるにぎわいのある都市」で28件。

それから4番目が「企業誘致や地場産業の活性化により、産業に活力があふれる都市」で27件。大体、皆さんのお考えと大きな隔たりはないのではないかと思います。先ほど、伊東先生

からもお話がありましたとおり、農産物や豊かな自然など熊本の特徴を活かした都市づくりを望んでいる会員が多かったということをご紹介します。

それから、先ほど姜先生から、どこに集積をさせるかというお話がありました。これまで、この会議で論議されたことはありません。これは皆さんも非常に関心のあることであり、この「州都構想の骨格(案)」の中に、「道州制が実現したときにすぐに熊本が州都候補になれるよう準備」とあります。私も、本当に早く用意をすべきだと思います。前回、九州大学の跡地である箱崎に広大な敷地があり、いつでも博多が準備できている状態だと申しましたが、熊本としてもそれに対抗する必要があるということです。熊本は、どちらかというあまり地震はありませんが、水害が非常に懸念されます。この間も、中心市街地では、白川がほとんど氾濫寸前の状態でしたので、まず水害、災害に強い場所が必要であると思います。

それから、九州各県、全国、あるいは世界からここに集結するという意味では、交通の便が極めて良いところが、やはり2番目に求められるだろうと思います。

3番目は、新たに用地を獲得する必要がない、県有地などの公共的な用地を持つておく必要があると思います。

4番目は、先端的なものとして緑の中にそういう州政府があるということです。

そういうことから考えてみますと、熊本の場合には万日山が熊本駅の西側にあります。ここがまさに県有地であり、今、全く開発されていません。州政府のために、ずっと残されていたのかという運命的なものを若干感じますが、やはり私たちとしては、県民の間でも良い仕事を急ぐ必要があるのではないかと思います。例えば益城台地や水前寺の競技場と言う人もいるかもしれませんが、いずれにしても用地を確保するという意味では、今、万日山が最適かなと思っているところです。

それからもう一点は、私は熊本大学の経営協議会の委員もしていますが、「開く」という意味では、学生、留学生をどう熊本に引っ張るかというのも非常に大きな課題です。先ほどの資料を見てもお分かりかと思いますが、留学生の数が九州では下から3番目です。つまり熊本は、学問の都市でありながら、留学生受け入れは真ん中程度で、大分や福岡、長崎にも大きく差を広げられています。一番のポイントは、留学生の宿泊施設をぜひ整備する必要があるのではないかと。それがひいては東アジアに向くし、品格ある都市にもつながっていくのではないかと。この話は今まで出ておりませんでしたので、これを改めて追加させていただきます。以上です。

【坂東委員】

今ちょうど、田川委員が留学生の話をなさいましたが、留学生のように永住ではなく、ある一定の期間熊本に住む方を、任期付き県民と申しませうか。夏目漱石も、熊本に滞在したのは5年間です。ある時期熊本に住んで、そこでいい仕事をして、自分も生涯熊本に対して愛情を持ち続けるという任期付き県民を経験した人が、県内に住んでらっしゃる方の3倍でも5倍でも10倍もいる。これは、目には見えないけれどもとても大きな力になるのではないかと思います。私たち自身もこの未来会議に参加させていただいたことによって、遠くから熊本をよくするにはどうすれ

ばいいか、寝ても覚めてもとまではいきませんが、折に触れて考えるようになっております。ぜひそういう方を増やしていただきたい。例えばアーティスト・イン・レジデンスのような形で、ある一定分野でこれから伸びそうな人を選んで、住んで創作活動にあたってもら、あるいは研究活動にあたってもら、熊本システム、熊本フェロシップ。お金よりもむしろ住居の提供ということになるという気がしますが、そういった形をぜひ作っていただきたいと思います。

先ほど、農村・農業の担い手ではなく、支え手を増やす意味でのグリーンツーリズムのように、長期滞在型の人を増やすということを申しましたが、単に来てくださいではやはり無理です。例えば地域で農業法人をお作りになって、そこが雇う。そんなに高給を払う必要はないと思うのですが、生活を維持するだけのお給料を払うという形で、農業をやってみたいと考えている若者、あるいは中高年の人たちを引きつけるという仕組みづくりを行っていただく。そのことが、結果として本当に熊本の力を、もしくはステータスを上げていくのではないかと思います。

【御厨委員】

一番最後というのはつらいものでありまして、大概話は出てしまっただう話したらいいのか常悩むところですが、一点だけ私の話を申し上げたいと思います。私は、4月から放送大学に関わっておりますが、放送大学は、全国に拠点があります。熊本も、熊本大学の一角に熊本学習センターというのができており、ここでスクーリングをやったり、多少番組を作ったりすることもあります。おそらく、今日お話に出たようなことを含めて、放送大学の中でも話ができることだろうという気がします。私は、今日のこういった話を中心に、熊本に州都をぜひ持ってきてというのはなかなか番組として作りにくいと思いますので、そこまでいかないまでもそういうふうに見えるような形で番組構成をしたり、あるいはスクーリングをしたりというのを、少し考えてもいいのではないかと思います。実現するか分かりませんが、蒲島さんに対して、そういうことも考えてしますということを最後に述べて、私の話の締めにしたしたいと思います。以上です。

【蒲島知事】

長時間にわたりご意見を賜り、誠にありがとうございます。この3回目ですさらに議論が深まったのではないかと考えています。“州都”をテーマとしたくまもと未来会議は、今回の第3回会議で一応終了したいと思います。今後は委員の皆さんと相談しながら、庁内に設置した部会で、州都構想として3月末までに取りまとめたいと考えております。そこで、今日の会議を踏まえて、私なりに整理させていただくと、次の5つの点があるのではないかと考えています。

まず1点目は、九州の地理的中心地にある熊本が九州のために力を尽くすためには、横軸の幹線道路が必要だということです。2点目は、全九州をカバーできるような、あるいはアジアまでという話もありましたが、防災拠点機能を持つことが、州都につながるのではないかと考えています。3点目は、民間も含め九州全体のさまざまな組織や団体の事務局機能を率先して担って、九州の良き世話役となることです。4点目に、魅力をつくるだけではなくて、魅力を発信する、そして人を呼び込むということが必要ではないかということです。最後にもう1点、場所が大事ではない

かということが、今日の会議で出てきたことではないかと思っています。この5点を考えながら新たな案をつくり、3月末までには州都構想をまとめるというスケジュールでいきたいと思っています。

この3回、皆さん精力的に議論してくださいましたが、議論することが実は大事で、実際に道州制ができた後で議論しても遅いと思っています。

もう一つは、県庁全体が州都にこれほど一生懸命に取り組むというのは、どこの都道府県でもないことだと思っています。知事以下、各部局が本気になって州都のことを考えていると、そのことによって熊本のレベルアップにつながっていくと私は思っています。そして、夢は必ず実現するというのは私のモットーでありますので、この夢もぜひ私は実現させたいと思っています。それでは事務局の方に返します。

【事務局】

委員の皆様方には長時間のご議論ありがとうございました。議事録は後日、県のホームページに掲載させていただきたいと思っております。それでは、先に委員の方々から退席をさせていただきますので、傍聴者の方はしばらくお待ち下さい。